

## 11-2 リスクテイキング行動

リスクを認識していながらそのリスクをとることを、心理学では「リスクテイキング行動」と言います。一般に、リスクテイキングのプロセスは図 1 のように表わされます。すなわち、最初にリスクの存在に気付く、次にそのリスクの大きさ（被害を受ける可能性と被害の大きさ）を見積もる、そして最後にそのリスクをとるか避けるかを決める：この、「リスク知覚」、「リスク評価」、「意思決定」の3段階すべてに、状況、年齢、性別、経験、性格などの要因が影響を及ぼします。

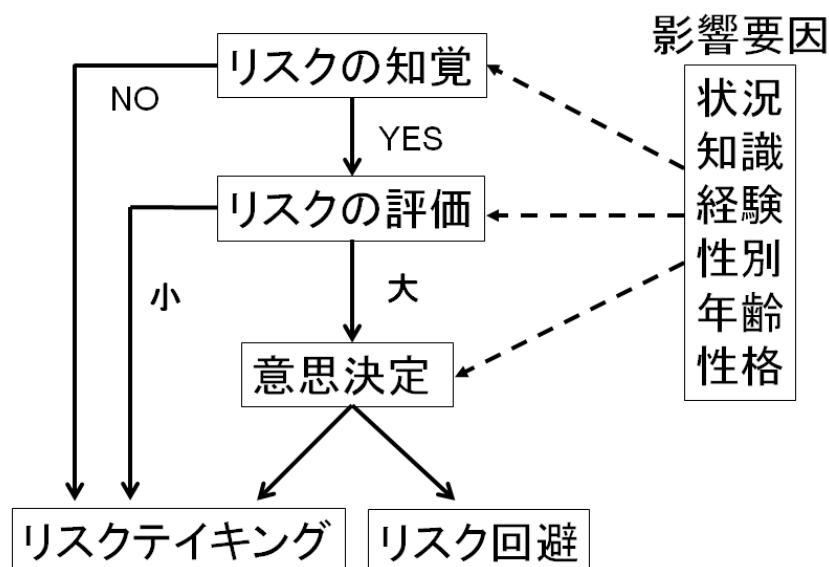


図 1 リスクテイキングに至るプロセス

リスクの存在に気づかなければリスクを避けようとはしません。薄氷の張った池に雪が積もっていると、そこを初めて通りかかった旅人は氷が割れて池に落ちるリスクに気づかず上を歩くかもしれません。リスク知覚には知識と経験も大きな役割を果たします。自動車を運転しているときに道路脇の公園からボールが転がってきたとき、そのあとから子どもが飛び出してくる可能性を予測できれば、速度を落としてブレーキを踏む準備をするでしょう。

リスクの存在に気づいた後は、そのリスクの大きさを評価するプロセスが続きます。リスクの大きさは、被害が起こる確率と被害の程度の積と定義されることもありますが、主観的なリスクの大きさは必ずしもこのような客観的な値に一致しません。未知なるリスクや恐怖を伴うリスクは高めに評価されやすく、慣れや成功体験によってリスクが低めに評価されることがあります。ここでも知識と経験が影響します。さらに、女性は男

性よりもリスクを低めに見積もり、若者は中高年よりもリスクを低く見積もる傾向があります。

リスクを評価したうえで、そのリスクをとるか避けるかを判断します。通常はリスクが大きいと評価すれば避け、小さいと判断すれば避けない、あるいは積極的にとるでしょう。しかし、リスクをおかして得られる成果・報酬の魅力が大きければ多少のリスクはとるでしょうし、成果・報酬がリスクに見合わないと思えばたとえ小さなリスクでも避けるでしょう。また、リスクを避けなくても自分の技術・能力をもってすれば目標を達成できる、あるいは事故を避けられるという自信がある場合はリスクをとりに行きます。リスクをとるか避けるかの判断に影響する因子には、本人の価値観、周囲の人や文化の評価もあります。「男なら勇敢に立ち向かうべきだ」「失敗を恐れず挑戦するのはカッコイイ」と、本人や周囲が思っていたら、同程度のリスク評価であってもリスクをとる方向に判断が偏るでしょう。

ところで、ドライバーは交通環境に受動的に曝されているわけではありません。むしろ、走ることによって交通環境を自ら作り出しているのです。同じ道路でも、時速40キロで走るより60キロで走る方が運転の困難度は高くなります。遅いクルマが前にいても、おとなしく追走していれば難しくないのに、追い越したり車線変更をしたりしようと思うから事故リスクが高まるのです。

運転行動がドライバー自信をとりまく交通環境を変化させ、それによって交通環境の負荷が増えたり減ったりする事実を図1のモデルに組み込んだのが図2です。なお、ここでは「リスクの知覚」を公園から飛び出してくる子どものような「ハザード」と、自分の運転振りでも変化しうる「交通環境の負荷」の二つに分けました。

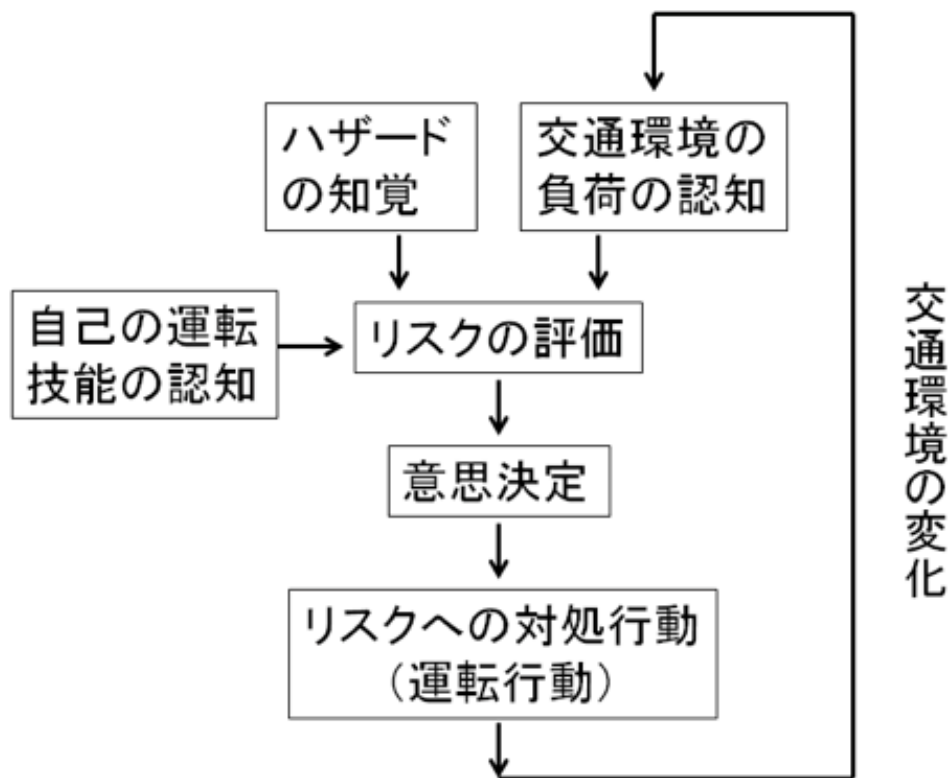


図2 交通環境に働きかけるドライバーの行動モデル